

こうかい ひこうかい べつ
公開・非公開の別

■ 公開
□ 部分公開
ひこうかい
□ 非公開

第2回浜松市外国人市民共生審議会会議録

1 開催日時 令和5年11月22日(水) 午後6時00分から午後7時30分

2 開催場所 市役所 本館8階 第5委員会室

3 出席状況

委員 アルバレズ アントニ

小笠原 盟

川越 レニ

只尾 ジェニファー

丹野 清人

トリゴエ デイゼ マミ (敬称略・五十音順)

事務局 国際課 課長 松井 由和

国際課 課長補佐 古橋 広樹

国際課 一般職員 山村 果穂

4 傍聴者 3人 (一般：2人、記者：1人)

5 議事内容 (1) 今後の審議のテーマについて
(2) 現在の防災に関する取り組みについて
(3) 外国人市民への防災教育・危機管理体制の強化について

6 会議録作成者 国際課 山村 果穂

7 記録の方法 発言者の要点記録
録音の有無 (有・無)

8 会議記録

1 開会・挨拶
《国際課長挨拶》

2 委嘱書の授与（第1回欠席者のみ）

3 委員の自己紹介
《各委員による自己紹介》

4 今後の審議のテーマについて
《事務局から説明》

3年間の任期で次のテーマについて順に審議することで決定した。

- (1) 外国人市民と防災・危機管理体制の強化
- (2) ライフステージに応じた支援体制の構築
(子育て世代への支援や、子どもの健全な成長のための支援)
- (3) 多様性を生かした文化の創造・地域の活性化

5 防災・危機管理体制の強化に関するこれまでの意見
《事務局から第1期・第2期審議会での意見及び提言について説明》

6 現在の防災に関する取り組みについて
《浜松国際交流協会（HICE）キクヤマリサ氏から多文化防災事業について説明》
《事務局から防災ホットメールの配信について説明》

7 外国人市民への防災教育・危機管理体制の強化について

丹野委員長：それでは、キクヤマ氏と事務局からの説明を踏まえて、現在の浜松市の取り組みについて、皆様のご意見やご感想をいただきたいと思います。まずはキクヤマ氏から説明のあった多文化防災事業について、いかがでしょうか。

川越委員：そもそも HICE（浜松国際交流協会）について知らない、何をやっているかわからない、どこにあるのかわからないという外国人市民もいるので、浜松市に転入するときに知らせてもらえると思います。

キクヤマ氏：困ってから HICE に来るのではなく、困らないための HICE にしたいと考えています。まずは HICE について知ってもらうことが重要なので、グローバルフェアやインターナショナルフェスティバルのような楽しいイベントで知ってもらったり、そのようなイベントのちらしに HICE のマークを大きく載せたりしています。

アルバレス委員：私は今育児休業中ですが、静岡県総合庁舎の中にあるジョブステーションで働いています。ジョブステーションで相談に乗っている中で、就職のこと以外に日常生活で困っていることがある人にはHICEを案内しますが、HICEのことを知らない人もいます。転入時のお知らせや口コミで知ってもらうのに加えて、若い人向けには、HICEがどのようなところか、Facebook、Instagram、TikTokなどで20～30秒程度の動画で紹介するのが効果的だと思います。困ったときにふと思い出せるような印象付けが重要ではないでしょうか。

また、ずっと疑問に思っていたのですが、防災訓練を朝一でやる必要はあるのでしょうか。私はHICEの防災リーダーなので訓練に参加することもあります。朝早いせいか、参加者は高齢の方か、学校から参加するようにいわれたと思われる子どもばかりです。ずっと続いてきたことを根本的などころから変えるのは難しいと思いますが、災害はいつ起きかわからないので、例えば日曜日の夕方など、時間を変えてみるのはどうでしょうか。

丹野委員長：防災訓練で重要なのは、より多くの人が参加することですね。時間を変えてみるのはよいアイデアだと思います。

トリゴエ委員：以前は学校から外国人の生徒にHICEニュースが配られていたと思いますが、今も配られていますか。そのときは、子どもが親に知らせることで、みんながHICEのことを知っていたように思います。

キクヤマ氏：今も配っていますが、言語別に発行していたものを1つにまとめました。また、英語とポルトガル語は見出しだけで、詳細はホームページに載せてデジタル化しています。

トリゴエ委員：HICEは「ハイス」と発音されますが、ポルトガル語では「ハイス」とは発音しません。JICE（日本国際協力センター）やJICA（国際協力機構）と勘違いする人もいます。

丹野委員長：それは考えたことはありませんでした。略語にするときは、言語の発音の違いも考える必要があるのですね。

只尾委員：フィリピンでは災害が起きたときは自分で何とかするという考え方をするので、防災のことに関心がない人が多いです。また、フィリピン人は日本人の配偶者が多いので、困ったら配偶者を頼りにすればいい、という人もいます。

防災リーダー研修も、仕事がある場合はもちろん、やっとな来た休みに参加してもらえるかという、難しいことが多いです。対策を考えていますが、なかなか上手くいきません。先ほどアントニ委員もおっしゃったように、なぜ朝なのかと聞かれたこともあります。防災訓練プラス何か、興味を持ってもらうためのイベントやセミナーをやるかと考えています。

川越委員：インドネシアの国民性もありますが、インドネシア友好協会の活動でも、何か楽しみがないとなかなか参加者が集まりません。例えば、清掃活動だけでは参加が見込めない、ピクニックを組み合わせるなど、工夫しています。特に効果的なのは、食べ物と報道関係です。テ

レビ局や新聞記者が来るといって、喜んで参加してくれます。「今年の料理教室は誰の写真が載っているか」など、みんなで新聞を見て話したりしますよ。

小笠原委員：中国人は漢字がわかるので、インターネットで必要な情報にたどり着きやすいと思います。HICEを知ってもらおうアイデアとしては、外国人がよく集まるところにHICEの連絡先を記した名刺のようなものを置いておくのはいかがでしょうかと考えました。また、先ほども意見が出ましたが、動画があれば、雰囲気はわかりやすいです。動画には、浜松市出身の有名人名人に出てもらうのもよいと思います。

丹野委員長：キクヤマさんに質問ですが、外国人防災リーダーには謝礼は支払われますか。

キクヤマ氏：年3回開催する研修の参加には、交通費のみ支払っています。研修の講師をお願いするときには、謝礼を支払います。実際に災害時多言語支援センターが立ち上げられて活動していただくときにも、もちろん謝礼が支払われます。

丹野委員長：防災リーダーは、消防団と同じように、ある意味「待機」している役割ですから、謝礼があってもよいのではないかと考えます。先ほど、約100人の防災リーダーが登録されると説明がありました。1人あたり1年間で1万円支払うと、約100万円で、実現できない金額ではなさそうです。謝礼があると、本人に責任感も生まれるでしょうし、登録者のうち約半数が機能していないという課題も、いづらか解消できそうですよね。

アルバレス委員：私も防災リーダーですが、謝礼があるなら、ボランティアとして位置付けているものを仕事として捉え直すと思います。仕事とボランティアのどちらを優先するか問われれば、お金を得るために仕事を優先するのが正直なところです。謝礼があれば、仕事として都合をつけると思います。

只尾委員：個人事業主として通訳や翻訳の仕事をしている防災リーダーも多いです。急遽仕事が入ることが多く、仕事が入ればそれを優先するのは仕方ないと思います。

キクヤマ氏：2015年から防災リーダーの養成を始めて、2020年から地域で活動することを企画していましたが、新型コロナウイルスの影響もあって、まだできていません。また、大規模災害が発生していないため、災害時多言語支援センター立ち上げの実績はありません。

丹野委員長：事務局から説明があった防災ホットメールの取り組みについてはいかがですか。HICEのFacebookの登録者は、ポルトガル語版では7,953人いて、ブラジル人は、家族のうち誰かは登録していると考えてもよさそうですね。フィリピン語版も910人で、結構な割合で登録されていますね。ベトナム語版は、技能実習生や単身者が多いという特徴があるので、登録者が比較的に少ないのだと思います。HICEのFacebookの登録者数と比べると、防災ホットメールの登録者数は少ないですが、どうしたら登録者が増えると考えますか。

事務局：転入者には、暮らしに必要な情報をまとめた「ウェルカムパック」を渡しています。その中で防災ホットメールの登録についても案内していますが、二次元コードを読み込んで登録してもらったところまで行き着かない課題があります。

ご説明したとおり、防災ホットメールは職員が手作業で翻訳していたので、1つのメールを翻訳するのに30分から60分程度かかってしまっていました。これが、RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）の導入で、日本語版の配信から1分程度で自動翻訳してくれるため、ほぼ遅れなく、翻訳版を配信できるようになりました。防災ホットメールと同じ内容をHICEのFacebookにも投稿してもらいますが、現状、翻訳版をHICEの職員が確認し、それを投稿してもらうため、防災ホットメールよりもやや遅れてしまいます。さらに迅速化するには、HICEのFacebookともシステムを連携する必要があります。

丹野委員長：災害の情報は絶対に必要な情報ですが、いつ来るかわからないもののためだけに単一の機能のものに登録するか考えると、登録しないかもしれませんね。防災ホットメールの登録者を増やすよりも、HICEのFacebook登録者数を生かして、システム連携を進めるほうが現実的だと思いました。

川越委員：HICEのFacebookのストーリーに定期的に載せるのはどうですか。投稿を見る人は少なくとも、ストーリーはその3~4倍の人が見ていることもあります。20秒~30秒弱の動画では掴みが肝心なので、インパクトがあると、みんな続きが気になって見てくれます。ストーリーは1日で消えてしましますが、同じ内容のものを繰り返し載せてもよいと思います。

丹野委員長：その他、今後の事業や、周知の方法について、どんなことが必要だと思いますか。

アルバレス委員：日本人の妻と、どのようにしたら外国人が参加するか、外国人に情報が届くか話し合ってみました。それでまず意見が出たのは、やはり時間のことでした。月曜日から土曜日まで仕事をしている人が、週1回の休みの日曜日に、それも朝早くから参加するかと考えると、なかなか難しいと思います。

それで、次に考えたのは、景品などのインセンティブです。例えば、自治会の防災訓練に参加したら1つ、HICEの外国人向け防災セミナーに参加したら1つ、防災に関する動画を見たら1つ…というように、スタンプラリーをし、そのスタンプラリーが完成したら「ミニ防災セット」が景品としてもらえるというのはどうでしょうか。例えば、この前、水を直接入れて持ち運べる防水のバッグをもらったのですが、災害のときに使えるなど感心しました。景品をもらえれば嬉しいですし、それが防災に関連するものなら、実際の災害のときにも役に立ちます。

それか、まちおこしにつなげて、浜松市の店やイベントで使えるクーポン券を景品にするのもよいと思います。イベントで使える500円券を景品にすれば、イベントの集客や出店する人の売り上げにもつながりますし、浜松市のイメージアップにもなって、win-winです。

あとは「参加してよかった」という口コミですね。1人でも参加すると、外国人コミュニティー、特に40代~50代の世代の方たちはすごく仲がよいので、景品がもらえたりすると口コミがより一層広がると思います。お店のお菓子を1つサービスするなどよいと思います。

丹野委員長: 予算を考えると、浜松市の外国人市民が約2万8千人いますが、スタンプラリーを完成できる人は数百人程度を見込めばよさそうですね。例えば100人なら、1人あたり500円券として考えて5万円です。クーポンがもらえるなら行ってみようという気になってくれる方もいると思いますし、結果としてスタンプラリーが完成できない人にも、一定の防災の取り組みが届くことを考えると、かなりコストパフォーマンスが高いと思います。

その他にやってほしい取り組みはありますか。

川越委員: 今は、学校にも外国ルーツの子供が当たり前のようになっています。外見からはわからなくても、物事の考え方には違うところがあります。学校の中で外国人のことも含めて考えられるような防災教育ができるとよいのではないのでしょうか。

丹野委員長: 防災は、外国人・日本人関係なく一緒にやっていかなければならないことなので、その点では、学校のようなところで、同じ住民としてどうしていくべきかを考える取り組みができるとよいですね。日本人にも、外国人が困っているときどうしたらよいか心がけてもらうことが重要なので、学校で教えるのが1番よいかもしれません。

1番課題になるのは、技能実習生や留学生など、来日して日が浅い人に対する防災教育だと思います。その中でも特に単身者で、職場や学校と自宅との往復になっている人は、市役所とのつながりもほとんどないですね。技能実習生は、受け入れている事業所や監理団体から、留学生は、学校から情報が伝わるようにしなければ、難しいと思います。雇用者や学校にも責任を担ってもらえるよう、お願いするしかないと思いますね。

只尾委員: 防災リーダーの養成研修や防災訓練に参加したくないわけではない、子供が面倒を見ないといけないから参加できないという人もいます。そこで、親子で参加できる企画はどうか考えました。ゲームで遊びながら学べると子供と参加しやすいです。もう1つは、開催の回数です。その日は都合がつかない、となると次の機会がしばらく先になってしまうので、可能なら毎月機会があるといいと思っています。

丹野委員長: 確かにそうですね。養成研修に子供も連れて来てくれるなら、子どもにとっても防災訓練になりそうです。ただ防災を学ぶだけではなく、あらゆる世代が一緒に楽しみながら学べるような場になるとよいですね。

アルバレス委員: 以前参加した防災訓練では、マニュアルが多言語化されていましたが、読まない、読めない、読むのが億劫だと感じている日本人が多いと感じました。対応に慌ただしいので、個別の言語対応まではなかなか行われなかったと思います。

私が中学生だったとき、職場体験で介護施設に行き、その中でリクリエーションをするように言われました。当時はまだ日本語が全然わからなかったのでポルトガル語教室にしましたが、施設のおじいちゃん、おばあちゃんたちが「面白い」とか「しゃべってみたい」とか、とても喜んでくれました。その体験を思い出して考えたのは、外国人防災リーダーが自分の言語を地域の人に教える「防災言語教室」を開くことです。日本人は、1度心を開くと自分から歩み寄ろうとしてくれる方が多いのですが、その1歩までが難しいと思っていますので、そのきっかけになると考

えました。日本人が外国人に対して何かやるばかりではなく、その反対の取り組みも重要だと思
います。

丹野委員長：防災は国籍関係ないことですし、むしろ今後は、高齢化している日本人の方が助け
られる立場になるでしょうからね。

小笠原委員：キクヤマさんに質問ですが、外国人防災リーダーにはどのように登録できますか。
研修のことはホームページでも見られますか。

キクヤマ氏：年3回の養成研修に参加したら登録できます。年3回参加が難しいという人がいる
ので、1回でまとめて研修をすることもしています。ホームページにも情報を載せています。

《事務局からの連絡事項》

4 閉会